

次期東北圏広域地方計画策定に関する第2回有識者懇談会 議事要旨

1. 日時：令和4年9月15日(木) 10:00～12:00
2. 場所：東北地方整備局水災害予報センター（Web併用）
3. 出席委員
石井重成委員、今村文彦委員、姥浦道生委員、小笠原敏記委員、鎌田真理子委員、竹下香織委員、舘田あゆみ委員、田中麻衣子委員、中出文平委員、浜岡秀勝委員、三浦秀一委員、宮原育子委員、若菜千穂委員、渡辺理絵委員

4. 議事

骨子策定に向けた意見交換

主な発言内容

議事

事務局より議事について説明を行ったのち、女性活躍の観点も含めて次期計画の骨子策定に向けて盛り込むべき論点等について意見交換が行われた。各委員から出た意見は以下のとおり。

- ・女性活躍について、共通するのはやはり「給与が安い」ということである。山形県は全国で43、44位の賃金ランキングであるので、山形県は賃金を上げようという動きがでている。
- ・その原因を考えると、女性は補助的な仕事をしていればいいという風潮があるのではないかという話になる。
- ・山形県ではアンコンシャスバイアスを解消することを目的に、若い女性が何を思っているのか、という本音を聞く女子会を行って、山形県の良い所・悪い所を冊子にまとめて配布するという事業をやっている。
- ・そこででてきたのは、会社であれば給与が低いという問題や長時間労働、家庭の話では家事労働・育児が女性に偏っているという不満である。職場はまだましになってきているが、地域には男尊女卑、女性・若者が軽視されるという風潮が残っている。PTAもましになってきているが、若い人が発言しても年代の高い人たちから発言を無視されるといった声が出てきている。県はこれらを隠さずに発信して、自治体の男女共同参画の担当者にみてもらうという画期的なことを行っている。
- ・ライフル総研が、地域の風通しの良さというものをランキングにしている。よそ者を許容する文化度のランキングであり、許容度が高い地域ほどUターン者が獲得できる

というが、山形県のランキングは低い。そのあたりの空気感と産業構造から、山形県で若い人がやりたい仕事が少ないとなってしまうのではないか。こうした構造の要因は見えていて、改善しようとしているところである。

- ・最近では東北各地に支店がある企業の女性だけの研修の講師をしたが、男性と女性とのギャップがあり、年配男性が若い女性に活躍してほしいと思っているが、何をやっていいのかわからず施策を打ち出せないでいる。まずは当事者としての意見を出してほしいという動きがある。同じ女性でも世代間ギャップがあり、生理休暇の使い方など分断とギャップを埋める対話、現状を知ってもらうことが必要である。これは民間も地域も取り組んでいる印象がある。
- ・令和4年6月に内閣府から男女共同参画の白書が出された。その中身をみると現在まで当たり前だと思っていた常識が変わりつつあることがデータで示されたという印象を受けた。
- ・子育て世帯が日本全体の7割を占めていた時代から、子供がいない世帯が6割になっている。世の中で逆転の減少が起こっていることに驚いた。
- ・女性の人口の半分は90歳以上まで生きるだろうという結果もでていた。これまで子育て世代に対して支援を強くしていくことが人口減少を食い止めるとされていたが、一方で、子育て世帯がマイノリティーになっていく。これに対する手立てが必要である。
- ・秋田県を中心に女性の活躍推進というようなことに取り組んでおり、女性の意識の変化を感じている。しかし、女性達の意識が変わり始めているものの、それをサポートする夫や会社の上司、経営者が、女性にしかるべきポストを与える、サポートするといったことがまだまだできていないと感じる。
- ・一方で、20代の男性が子供を抱っこして歩いているのは当たり前の光景になってきた。若い層には家事を分担していくのが当たり前のようで、過渡期にあると感じている。
- ・女性は自分が我慢すれば状況がうまくいくと考えて抱え込んでいることが多いのではないかと思う。事例を聞いていたものの、自身はあまり経験がなかったが、思わず出てきた思いにはじめて気づき、意外とそういった女性が多いのではないかと思った。
- ・女性はサポート的な仕事しか与えられないという現状もあるが、ポジションや役割を与えられるとそれに応えようとする、人のために尽くしたい、役に立ちたいという思いが強いため、そういったポジションを与えることができると、自分自身のやれること、できることの可能性を広げることに関わると感じている。
- ・そのような思い切ったことをやっても大丈夫だというような男性・上司のサポートが出来るような、コミュニケーションや人間関係がある仕事環境であれば、女性はもう少しいろいろなことにチャレンジしていけるのではないかと感じている。
- ・福島県は1980年以降、約20か国から外国人花嫁が農村地帯に来ている。色々なコミ

ユニティにとけ込めず課題を抱えているのではないかと感じていた。共通言語は英語である葛尾村は国際的だと感じた。

- ・外国人花嫁は、子供を産んで育てても家族の一員として認められず、家庭内では姑と息子が結びつき自分は排除されているといった悩みを聞いた。
- ・しかし、大学などに入学してくるフィリピン人との混血の学生はしっかりとした人が多く地域で活躍もしている。2代、3代と続いていくことで日本に同化して差別や対立、ハンディキャップが無くなっていくのだと感じた。
- ・社会学の領域の教育と就労について、第二次世界大戦後、女性のハンディキャップは改善されていないと言われている。福祉に関しては、介護保険の社会保障ができたことにより、女性が活躍できるステージができた。そこでは男女の賃金格差もなく、女性も管理職に入っている。2000年から介護保険が始まったため、大学から学びを始めたというわけではなく、途中で勉強を始め、国家資格を取得したということである。
- ・例えば、介護福祉士、精神福祉士、県に登録するケアマネジャー、主任ケアマネジャーなどといった資格を女性達が取得し、福祉の分野では女性優位の環境が出来ている。これは特殊な例であり、新しい産業が出来たことで厚生労働省の財源が配分されており、各市町村で生業が立ち上げられている。給料は安いですが、国家資格があることで正規雇用で男女格差もなく他の産業と変わりなく給料をもらえている。
- ・ここから学びとれることは、第4次産業革命では新しい産業・分野のビジネスがでてくるときに、リカレント教育をしっかり受けることが重要である。そうすれば女性も正規雇用の枠組で活躍できる可能性が非常に高くなる。現在の日本では、4割の非正規雇用のうち7割が女性である。一億総活躍社会というのは、女性の非正規雇用者を増やすだけではないかと言う人もいる。
- ・非婚世帯・単身世帯が増えるということであれば、女性も経済的に自立をしなくてはならない。そのためには何かしらのライセンスが必要で、正規雇用に入るためのリカレント教育を受けられる環境が大事である。キャリア教育、就労支援システムもあるため、学習しながら女性も社会に参画していただけたらと思う。
- ・また、福島県の鮫川村では「まめで達者な村づくり」に取り組んでいる。日本の女性の貧困率が非常に高いことから、農産地域において、地場産業としての農業でお小遣いを稼ぐような大豆栽培をして、それを村が買い取るという仕組みである。こうした所得保障があれば地方においても女性達の経済的なサポートになると思う。
- ・基幹地域の農山漁村文化協会に記載があったが、荒れてしまった山を耕作し有機栽培を週末に行っている。ウィークエンドファーマーとして子育て世代が家族の繋がりを強め、健康づくりで有機栽培の野菜を食べられるなどの効果がある。
- ・農村で地域づくりやワークショップが開かれているが、5~10年後には地域をつくってきた70代後半の方が居なくなってしまう。その下の世代は農村にいないため新しく

つくり直せばよい、新しい価値観になると思うがまだ見えていない。この点をおさえながら、今度の計画に取り入れていかないといけない。今までの価値観では 5~10 年後を見通すと全く違うものになると思う。

- ・不確実な未来ということで、自然災害やコロナなど現計画の策定時には想像していなかったことが起こっており、計画を作っても意味がなくなることがあるため、素早く動ける対応にしていけないといけない。
- ・これから先は東北が一番住みやすいと感じている。10 月まで 30 度近くまで気温が上がる九州などを見ていると、東北が温帯で他地域は熱帯となりそうであるため、ここで東北を打ち出さないといけないと思う。
- ・また、集落の中でも電子マネーや LINE グループを使用するなど、デジタル化を取り入れていくことが必須だと感じた。農村に住んでいる若い人は、いきなり海外に物を売っているような時代であるため、デジタル化をベースに考えていかないといけない。
- ・私もずっと仕事をしてきたが、比較的小さい組織で、女性も多い環境だったためか性別による苦労はあまり感じてこなかった。科学的には性別は男女で分けられるものではなく、グラデーションだと言われている。男女など二極でとらえるのではなく、新しい多様性への対応や構築という表現をしてはどうか。
- ・男性、女性、若い人、都市と地方というのは固定的な価値観であるため、グラデーションを「新しい多様化」として捉える方がしっくりくると感じる。
- ・想像すべき将来像は皆で議論すると思うが、岩手県では生活の満足度ではなく幸福度を図ろうという勉強会を行っている。経済的に恵まれていても幸せとは感じない、経済的に恵まれていなくても幸せである、といったことをどのように政策に取り入れていくかが重要である。
- ・岩手県北に行った際に、「ここの土地が 1 番好きで子供達にこの素晴らしさを知ってもらいたいため何とかしたい」と明るく言っていた人がいて、幸せはこのようなものだったと思った。病院が遠いから、年金が少ないからではなく、何とかなるだろうと希望があるからだと思った。こうした計画になると良い。ポテンシャルの熱量のようなところをポンプアップしていけるような計画にしていきたい。
- ・取組の軸は地域生活圏で良いと思うが、例えば岩手であれば盛岡とつながって、盛岡から仙台につながってということではなく、地方はこれからデジタル化により多極で繋がっていくと思う。その基盤、基礎を作っていけるようなメニューを取り入れてほしい。
- ・地域の郷土愛・子供の郷土愛について、新たな手法を取り入れながら母国の風土で子供や人を育てる山村留学、漁村留学といった取組がでてきている。最近岩手にはハーリーポッターのような学校が来ていることから、人を育てる視点を取り入れていきたいと思う。
- ・戦略にはやはりデジタルを取り入れてほしいと思う。

- ・交通分野でも電子マネーで支払いをしたら健康ポイントが付けるというような取組をしており、福祉の分野でそのポイントが使えるようになる。また公民館便りは紙では見ないため、LINE の公式アカウントを作り掲載するなどの取組をしているが、それに対する抵抗勢力をもの凄く強く感じる。しかし、意外と 70 歳代の方が孫と使っていたりするので、年寄りだから使えないだろうという概念をとっぴらっていききたい。
 - ・最近では自動運転と言われているが、東北は空飛ぶタクシーが必要だと思っている。自動運転が雪に対応出来るようになるには時間かかるため、東北だからこそタクシーなど新しい技術を取り入れて夢を広げていきたい。
 - ・田舎にいとどうしても有害鳥獣の対策を行うが、西日本や九州に行くと、被害対策の柵で田畑ごと囲われており、農村風景が変化している。東北はまだそこまでではない。より被害対策を積極的に進めることで農村風景を今ならまだ間に合うと思うので、東北らしい風景を守っていききたい。
-
- ・全体計画としてデジタル化が論点になると思う。骨子に記載がなかったが 1 つの意見としてデジタルの文言は是非入れて頂きたい。デジタルはあらゆる場面で既に生活の中に入っていることを示すため、内閣府等による「スマートシティガイドブック」のデータ利活用の図を提示した。防災、健康医療、観光、流通、交通などいろいろな分野でデジタル化が進んでいる。
 - ・データは物理的な距離や業界の壁も越えるので、ここで遅れてしまうと取り残されてしまうのではないかと考えている。委員の話にもあったが、デジタルを活用していないことで地域が選ばれないというリスクも非常にあると感じている。
 - ・例えば銀行の例として、最近娘が住宅ローンを検討した際に知ったのだが、物理的な窓口を一切持たないオンライン銀行が、最も人気が高いそうだ。大きな額のやりとりもオンライン手続きのみで済むため、時間や場所を選ばず非常に便利である。オンライン対応が進んでいない一般銀行などはむしろ選ばれない傾向にある。
 - ・地域を選ぶ際も、デジタル化の雰囲気や全くないところは特に若者の多くは選ばないと考えると、デジタルやスマートなどの文言を入れる必要がある。
 - ・身近なデジタル活用の例として、インフラ監視に住民が参加している事例がある。通常利用している道路に亀裂や崖崩れなど危険箇所を発見した際に、その場所をスマホで撮影し知らせることで、危険箇所を自治体と住民が共有し発見や修理が早くできるような仕組みになっている。デジタルを身近なものとすることで、大掛かりなシステムが不要となり、コスト削減につながったり、住民参加型や共助の取組を広げたりすることができる。東北全体など広域に行くことも可能である。
 - ・時間、場所、体力などに制限されない働き方が、デジタルでは実現可能と思っている。現在、大学でデジタルを活用した水産業の水揚げの自動化の手伝いをしている。全国の多くの水産現場ではご高齢の方々が高朝 4 時頃からずっと働いている。作業

の半分でも自動化されると非常に楽に仕事ができる環境になる。先端的な都市だけではなくそのような現場でこそデジタル化が必要だと思っている。

- ・女性活躍について。仙台や宮城では、若い人、中でも女性が首都圏に出て行ってしまふのが大きな課題になっている。私の娘や姪も大学を卒業して東京の企業に就職して離れている。個人的には引き留めようという気持ちは特になく、若いうちは様々なところで活躍してほしいという思いでいる。しかし周囲はなぜ東京に行かせるのかと否定的な意見を持っている人も多い。否定的な雰囲気自体が、逆に若い人を外に出してしまう原因になっているのではないかと感じることもある。
- ・東北は昔から閉鎖的なイメージがあり、今も払拭されていない。どこにいてもデジタルを活用すればすぐに繋がるという社会感を広め、オープンな雰囲気、閉鎖的なイメージを打破することが、女性活躍にも影響があるのではないかと。
- ・タイトルについて。「震災復興」をいつまでも前面に出す必要があるのか、疑問である。これはサブタイトルとして、もう少し前向きで未来思考のあるタイトルを掲げて欲しい。
- ・今の話にも関連すると思うが、現計画の中で震災復興からどのように自立的に復興をしていくのが主題におかれている。次に大きな絵を描いていくかと認識をした際に、東日本大震災がどのような社会変容やどのような未来に繋がる兆しを生んだのか見つめ返す視点が1つあっても良いと思う。
- ・過去を振り返ってみると、大きな災害でいろいろな政策や人の行動に対して変化を与えてきたと認識をしている。
- ・例えば、阪神淡路大震災ではたくさんのボランティアの方が訪れて、後々NPOという立場の方々を育み、法律を作っていく過程に結びついた。
- ・2004年の中越地震では、山古志村は元々2000人ぐらしか住んでいなかったが、10年後には1000人を切ってしまった。人口が半分になったが、新しく6次化の取組や農家レストラン、地域内外の交流が新しく生まれて、そこに住まれている方が生き生きとされている。そのような経過から地域おこし協力隊という制度に結びついた。復旧・復興という考え方、元々あったものを元に戻すだけではダメだと最初に言ったのは中越地震の皆様だと理解している。
- ・3.11が兆しとなった社会現象として、プロフェッショナル人材と言われる人達が地方圏に還流していった。地域に移住していく話は、3.11以前は自然豊かな環境やセカンドキャリアとして身を置いていくようなロハス系が主流だったと思う。一方で、3.11後に被災地で起きた多くの人の還流は、自身の技術やスキル、専門性を活かしながら地域の復興に貢献していきたいというモチベーションの方がいた事実がある。そこでは当然、葛藤やいろいろなハレーション起きたが、その分、化学変化が起きて事業が起きていったという事実がある。

- また、大企業と基礎自治体が連携をする包括連携協定を結ぶことやパートナーシップ事業を進んでいくということである。3.11以前は極めて限定的だった。都市部の大企業がCSRやCSVで都道府県と協定を結ぶというケースは過去にもあったと思うが、数万人や数千人規模の基礎自治体と大企業がいろいろな意味で連携することが散発的に生まれていった。
 - 三陸沿岸地域の場合、10年経ってからバラつきがあると感じる。取組を講じ、地域のエンジンとして自分たちのまちづくりの手段として活用して前に進んでいるところと、そういうことが昔のことに感じている地域と2つに分かれてバラつきがあると感じている。
 - 前回示したように、民間サイドにまちづくりの主体となるようなまちづくり会社、DMO、人材、資金のハブとなるような人や団体がいるのか、そこがキーだと思う。
 - 行政機関にはローテーションがあり、外部からの応援者でチームを形成したいというところは今は難しいと思う。
 - 第1回懇談会でコメントさせて頂いたように、どのようにローカルマネジメント法人を育てていくのか、作っていくのかということに帰結する話でもある。3.11はもちろん辛く大変だった出来事ではあるが、その後どのような社会変容の兆しが見られたか、振り返ったときに意味付けができるように、この意味付けが東北の将来を考えていく上でも大事なエッセンスになるのではないかと感じている。
 - 地域で顕在化している課題は、企業や人が関わってくれるための余白でもある。その課題を余白に転換していくことで、市場や政策の失敗と言われるような領域に対して、ソーシャルビジネスの視点などをオープンにしていくべきではないか。
-
- 地球温暖化対策や環境エネルギーの分野の地域活動は、NGOなど色々な分野で女性の方々が非常に多く活躍している分野である。
 - そうした意味では、環境のテーマの中で女性の役割は非常に大きいと感じている。カーボンニュートラルや再生可能エネルギー分野は非常に人が足りていない。特に地方で人が足りないという状況であるため、いつも東京からいろいろなコンサル・事業者が来ていて、事業が終われば帰ってしまう。地方の女性に限らずカーボンニュートラルを実現する人材はこれから必要である。
 - まちづくりも含めて非常に事業化しやすい。カーボンニュートラルは補助金も付きやすく、エネルギー事業を立ち上げやすい。まちづくりも含めて女性が活躍して頂ける分野ではないかと思っている。
 - カーボンニュートラルは、全国計画の中間とりまとめでも特に課題だと明記されているため、東北としても何かメッセージに出さなくてはいけない。東北こそ、日本のカーボンニュートラルを担う地域ではないかと思っている。2050年のカーボンニュートラルをめざす目標は政権によって左右されるものではなく、科学的・国際的

な根拠があり、ブレない目標であることを理解して頂きたい。

- ・再生エネルギーがとにかく足りていない。公共的な政策というよりは、RE100のような民間企業の動きになっている。エネルギー価格は今年の冬にはかつての約2倍に高騰し、11～12月にかけて電気代がまだまだ上がってくると思う。これは家庭や企業の中でも大変な負担になるため、これから大変な冬を迎えるという状況になってくる。
- ・今年は改正建築物省エネ法が成立し、2025年から住宅の断熱性能などが基準の適合義務化というのが始まる。20年以上実現しなかったものが、ようやく始まるため大変変化がこれから起こる。
- ・前回申し上げた地球温暖化対策法の改正の中で、再エネ促進区域の設定が今年でできた。また再エネ海域利用法で、洋上風車の促進区域の設定が盛り込まれている。国土計画に関わる内容がかなり具体的に出てきている。
- ・輸入木材の高騰についてウッドショックと言われているが、なかなか輸入ができなくなっている状況である。その中で、国産木材の需要が非常に増えていることも森林の多い東北にとって大変重要である。
- ・東北圏の可能性ということで、東北は日本で最も再生可能エネルギーをたくさん持っている地域である。特に風力エネルギーは大きい。
- ・日本最大のエネルギーの需要地は東京を中心とした首都圏であるが、そこには再生エネルギーが無い。隣接する東北がそこに供給をせざるを得ないポジションになっている。
- ・また東北は日本一の森林面積を持っており、CO2の吸収源として期待されており、さらに木材そのものの生産地域として日本一である。鉄やコンクリートに比べて木材はCO2を排出しないため、カーボンニュートラルな素材としてもこれから活用が必要になる。
- ・戸建住宅はもちろん木造であったが、これから中低層の建築物も木造化・カーボンニュートラル化の建築を進めやすいエリアである。再生可能エネルギーと森林木材によるカーボンニュートラルの実現先行エリアとして、日本に先駆けてそういうものを実現しなければいけないと考えている。
- ・地域課題の解決もセットで考えなければならない。東北は北海道に次いで光熱費、特に暖房機とガソリン代が多い。光熱費、ガソリン代も含めて両方合わせると、家計調査によれば全国費の平均と比べて年間8万円ほど多い。現時点で8万円の差があるというのは、今後エネルギーが2倍ほど増えるため16万円になる。そのようなレベルにこれから拡大すると考えられる。
- ・住宅の断熱性能基準が非常に低い状態で設定されてきたことが原因で、光熱費がかかる住居を生み出してきている。最近では、ヒートショックという寒い冬にお風呂に入った時に亡くなる事故があり、健康にも影響を与えている。これはその方自身の

原因ではなく、建築のあり方に問題がある。住宅建築を徹底した省エネ性能を追求して行くことで、経済的・健康的になる。それがカーボンニュートラルな生活であり、東北の課題解決も実現しなくてはいけない。

- ・カーボンニュートラルの実現は、膨大な新規の再生エネルギーの開拓が必要になっており、土地が必要になってくる。その中で人間生活との共生の問題が出てきているが、土地利用計画では再生可能エネルギー設備の位置づけが実は曖昧になっている。洋上風車も離岸距離海岸から1~2キロという話になっており、産業界では景気の活性化になるだろうと地元では期待もされている。
- ・一方で、住民の中で非常に不安に感じている人も多い。そういった地域住民への影響、地域住民がどう関わっていくかということも含めて、カーボンニュートラルとしての国土利用計画を立案し、その中に再生可能エネルギーの取組を入れていかなければならないと思う。
- ・東北の新しい将来像は、再生可能エネルギーと森林を活用した自立循環経済圏として、産業化が来て木材産業も活性化することで、そうなれば低コストでカーボンニュートラルを目指す企業の立地、誘致にもつながるのではないかと考えている。
- ・あわせて省エネも含めながら、産業だけではなく自立循環型の生活様式というようなものも築いていけると考えている。その中でも木造のゼロエネルギー住宅、ゼロエネルギービルを新築だけではなく改築も含めて増やしていくことで、交通問題とあわせて、大きな都市計画上の問題であるため、新しい交通のあり方として快適な自立循環型の生活・様式を確立していくことが重要である。
- ・今回はキーワードとして女性という言葉があるが、性別はグラデーションではないかという意見に賛同している。男性の中でも女性的な人がいて、女性の中でも男性的な人がいる。性的にマイノリティーの人がいるため、計画として女性と出しているのかは難しいと思う。一般的な「女性的な」という視点では、最終的に女性が活躍するのがゴールだと思うが、活躍する前に定住することも大事だと思っている。
- ・若い女性が定住しないと地域としての人口も下がってしまうため、女性が定住できるような環境をいかに作るかが大事である。若い人は東京など魅力的なところに行ってしまう。働くところだけではなく、女性にとっていいものをつくっていくことが大事である。
- ・地域の外に出ることについては賛成である。10人出て戻ってくるのは1~2人かもしれないが、その人たちは地域を愛して魅力的に思っているから戻ってくるのだと思う。戻れる場所をつくっていき、住みやすい地域づくりをすることが重要である。
- ・約20年前に秋田に来た時、祭りがあってコミュニティの強さ、地域に文化があることがすごいと感じた。維持するために何とか支援を上手く続けてほしいと感じた。歴史は簡単に生まれるものではないためサポートが必要になってくる。

- また、健康を軸として取り入れることが必要だと思う。亡くなる直前まで健康で生活していくことが大事であり、そのようなまちづくりが必要である。まちづくりというとウォークアブルという言葉があるが、外出して動きながら人と話せるような世界、地域づくりが重要だと思う。
 - 交通・道路計画の観点からは、道路の階層化をしっかりとつくってほしい。道路というと高速道路やバイパス、家の前の道路など色々な道路があるが、道路交通センサスという車の速度を計る調査においては、高速道路とそれ以外の2つにしか分かれていない。
 - 自転車に乗る場合で考えると段・ギアがある方が動きやすいと思う。車で移動するときも3~4つは段ができた方が良いと思う。日本の道路は残念ながら階層化されていないが、ヨーロッパの道路は上手くできている。
 - 委員のデジタルに関する意見もその通りである。しかし、デジタル化が進むと会社にもいかずテレワークをして食べ物もデリバリーになって動かなくなるため、健康面が心配である。交通分野の人間としては移動できるものをしっかり作っていききたいが、健康面も考えていかないといけないためそのあたりのバランスを考えていきたい。
-
- 本日のテーマの1つは女性活躍ということで、まずは足元を見なくてはいけないと考えている。本学の女性の先生と学生の人数データを見て頂きたい。こちらは1991年からの約30年間のデータである。
 - 30年前は1~4%と女性教員は非常に少なかったが、ここ最近の10年の中で10%を超えており、全体で見ると20%までになった。女性の率は高くなり良い傾向になってきている。しかし理想は当然50%だろう。ただし2割ぐらい増えてくると、いろいろな場面や議論の中で女性の活躍や発言が大学全体に影響してくると感じている。
 - 博士、修士、学士の人数のグラフについても、全体でいうと女性の率は数パーセントであるが着実に上がっている。その中でも博士課程学生は、最近非常に高くなっているというのも特徴である。社会人の女性が入ってきていることも影響していると思っている。
 - 3割を超えると次の世代の研究者、大学の教員は女性が高くなると期待しており、このトレンドを見ると女性の割合も右肩上がりになると思っている。スタッフや事務の方を入れると、50%を超えている結果になっている。
 - 一方で、防災や震災関連でいうと、発災時や避難所、復旧・復興時は女性を十分に受け入れる体制が限られていた。ただし実態は、避難所の運営や復旧復興は女性を中心に行っており、防災分野でも災害対応力を強化する上でも女性は不可欠である。現在での防災・減災の活躍している方も女性の割合が非常に高いと思う。
 - 前回、仙台防災枠組を紹介させて頂いたが、民間企業の活躍には女性や多様なステ

ークホルダーが重要と言われているため、特に震災のあとは期待できると思う。

- また、3.11 から 10 年経った後の活動で 1 つ紹介できるのは伝承（活動）についてである。各地で伝承施設・遺構施設が整備されており、それらを含めたネットワークしながら、各地を訪問・視察するツーリズム（プログラム）が少しずつ出来ている。そこでも女性が活躍し非常に目立っているため、これも意識して計画に入れると良いと思う。
- 岩手大学の現状は女性教員数が少ない。その割合を増やすため、教員採用の際は女性限定にして取り組んでいる。
- 大学としては、数にこだわりすぎていると感じている。研究室には毎年女性の学生が入ってくるが、就職を考える際、建設業界は大きく分けてゼネコン、建設コンサルタント、技術系公務員の 3 つに分けられるが私は公務員を勧めている。理由は福利厚生がしっかりしていて長く働けると思うからである。コンサルタントに就職している学生の話を見ると、仕事が大変で途中で辞めてしまう人がいて、非常に厳しい職場だと感じている。
- 理工系の女子学生の割合が少ない。高校訪問をした際に理系の女子生徒はどこに進学するかと聞くと、大体は看護・医療系・薬学系・福祉系に進みたいという話を聞いた。物理、機械、土木系にはなかなか目を向けてくれない。原因は職場環境なのか勉学的な問題なのか、そのあたりを注意していかないといけない。
- 女性はそれぞれ活躍・参加の仕方があると思う。先ほど言われていたグラデーションもその通りだと思う。積極的に働きたい人や陰で支えたい人など、色々な受け皿を用意した社会・まちづくりが形成できたらと思っている。
- 基礎的なデータからも、東北地方の人口がますます減少するのは明らかである。その中でもどのように魅力的な地域をつくっていくのかと考えたときに、デジタルという話があったが、そうした様々なテクノロジーを使ってどう補完していくのが非常に重要になってくる。
- 技術自体がないのか、実現する手段として社会的な合意や規制が問題なのかと考えたとき、日本は規制が邪魔をしている部分が多いと感じている。東北地方は東京と違い、例えば東京でドローンを飛ばしたらとんでもない話になる。セキュリティ上の問題や飛行機がいる、多くの人がいるといった問題になる。東北ではそのような課題が少ないと考えられるため、もっといろいろな実験が出来ると思う。
- 先ほど空飛ぶタクシーという話が出ていたが、実験を比較的しやすい環境である。テクノロジーというのは、東北地方だけが必要としているわけではなくて、日本全国でこれから必要とするものであり、世界中にも輸出が出来るものになると考える。本当はポジティブな言い方でできればいいが、東北地方の人口減少を逆手にとった

最先端のいろいろな事ができるクリエイティブな地域だと打ち出せるような地域像を作り、それを実際に実現して行くような規制緩和や特区などを積極的に活用していくべきだと思う。それによって、若い人や女性も含めて魅力を感じて面白いと感じてくるのではないかと思う。

- 今の若い人はお金や安定を目当てにというよりもむしろ何が面白いのか、自分は何がしたいのかという点を非常に重視しているため、卒業生もよく転職している。
- なぜ転職するかを聞いたら「やはりこっちの方が面白そうだ」、「こっちの方が自分のためになる」と答えていた。このように若い人のマインドは、以前と随分変わっているということを理解しつつ、それに合うような東北地方をどのようにつくっていくのが重要である。
- 地域をどのようにつくっていくかを考えるときに、エリアマネジメントというのはやはり非常に重要なキーワードになると思う。まちづくり会社は被災地などの中心市街地でできてきており、新しいフェーズになってきているが、そうした中心市街地をどうしていくべきなのか考えることと並行して、地方都市においては農村型、集落型のエリアマネジメントが重要になってくる。その中で、行政が行ってきた機能を行政が継続するのは難しくなる場合、民間の企業の方や住民の方とどのように連携してそれを維持していくのか。この辺りは首都圏とは異なるフェーズ、やり方や見せ方が必要であると思う。
- 皆様が思っていることに共感しているが、今議論しているのは、国土形成計画の中の東北の広域地方計画である。資料に国土交通省の問題だけではないと書かれていたが、実際には東北圏の計画に書き込めることと書き込めないこと、あるいは書き込んであまり意味がないことがあり、課題をどう国土形成計画の広域地方計画の中に落としこめるか、特に東北の色として書き込むかが大事だと思う。
- 資料 2 の意見交換の観点には女性活躍のことは書いていないが、国の中間とりまとめには女性活躍については大きく取り上げられている。
- そうした中で4つの計画の基本方針と7つの戦略的目標というのがある。7つの目標は、全て進めていくときに広域地方計画の中でどう書き込めるのかと意図しなければいけない。
- 東北の人口減少は致し方ない部分がある。東北圏は全国平均から比べても、かなり深刻な状況になっている。ただし、速度的には割と早めに起きており、東京や首都圏のように突然凄いスピードで起きていないため、今までのことを考えつつ対応するという意味では、量と速度の点で対応できるようなソフトランディングを考えられると思う。
- 東北圏の最大の利点は、前回の計画でも取り上げられているが、日本海側と太平洋側の両側を抱えていて、そこに重要港湾や空港、高速道路、鉄道などのインフラを

抱えていてどちらも見えるということである。他の圏域ではこうなっていない。

- ・メリットとして活かすことが必要であり、戦略的目標 6 の国際的な交流にある通りこれが東北としての強みになる。
- ・戦略的目標 2 の災害に強いは全国どこでも書くような金太郎飴のような内容ではないようなことが書けると思う。これから考える東北の広域地方計画は、他の圏域と同じような金太郎飴的でないところを書いていければよいと思う。
- ・全国的に課題を抱えている点では、同じことを書かざるを得ない部分もある。そういった点では出来るだけ東北に即した、東北に特化した事項を書き連ねて、結果的には全国にも通用するようになると良い。女性活躍はまさに全国共通事項であり、東北でどう活かして行くのかに結びつくのではないかと考えている。

- ・これから東北が直面することで揺るぎないこととしては、一層加速する人口減少と少子高齢化の対応ということが挙げられるかと思う。
- ・中山間地域での農地の有効活用、粗放的な利用方法も踏まえた土地利用の最適化を、集落や行政で検討する段階に入ったことは間違いのないと思う。東北では就職・進学での地方離れが依然として強い傾向があり、どのようにして対策を講じるか、人材確保を進めるかが課題として挙げられるかと思う。
- ・コミュニティに関していうと、住民負担の増大が問題であるが、例えば地域や地域運営組織の多業化を前提にした議論を行うべきである。例えば今注目されている農村 RMA は、農業部門に加えていかに集落機能、生活機能まで裾野を広げられるかということである。
- ・大学は鶴岡市にあるのだが、東北で一番の広域面積の市町村である。そういった所が、中山間・中心部と結ぶ公共交通機能をどう今後に活かすかが対応急務であると思う。現在、鶴岡市ではデジタル活用について物理的距離への対応を 1 つ打ち出して進めている。他の委員からも意見があったが、デジタルで対応できる部分とできない部分のすり合わせを急いでいる。
- ・ポスト・コロナ社会時代における都市農村の共生は引き続き大きな軸とすべきと考えている。多様な働き方や生き方を求める人々に対して、耳当たりの良い言葉で言うと、「開かれた地方」になると思うが、彼らに居場所や機会というものを提供する地方へというところが 1 つあると思う。
- ・ローカル経済圏の活性化、地域経済圏の活性化をより進めるべきと考えている。域内消費の拡大や生産から消費までの短距離化するようなフードシステムネットワークの創出が 1 つのキーワードになると思う。例えば、環境省は地域循環共生圏構想を打ち出しているが、域外に流れる財をどの程度地域内で留められるかが重要である。ここは一步踏み出しているかと思う。
- ・女性活躍の視点においては、農村や中山間においては、これまで農家レストランや

産直などで女性の活躍や役割の大きさが際立って報告されている。引き続きこのような場で女性の活躍が期待されるが、これに加えて先の3と4の具体的な取組の中でも自己実現を目指すような、女性像や彼らの起業を視野に入れてバックアップする体制を目指すことが肝要である。挑戦しやすい環境作りも女性の小さな勇気を生み出すのではないかと考えをまとめてみた。

- ・基本的には前回の計画と同様に、同じ東北という場所であるので踏襲している部分が多くあると思う。圧倒的な違いは、デジタルをどう入れるかというDXの内容、さらに人口減少についてである。担い手が足りないということが非常に深刻になっている状況であり、東北を支える産業の強化や人材育成も人が足りなければどうにもならない。
- ・もちろん手をこまねいて良いというわけではないが、夢物語を描いても仕方ないため、人口が減るのを前提としながら東北としてどのような将来像を描くのが重要である。人口減少について今まで以上に真剣に取組が必要になってくる。
- ・また、南側に首都圏があり太平洋と日本海に面しているため、圧倒的に地勢的なメリットがある。これを前面に強調しているような計画にするのが良いと思う。
- ・東日本大震災をどこまで継承するかという議論があった。これは当然継続的に取組むべきであるが、前回の話にあった原発震災ということもあり、再生可能エネルギーを東北でという大きな動きは現在も続いている。東日本大震災以降の1つの大きな流れである。
- ・再生可能エネルギーの一大生産地というようなことや、日本のカーボンニュートラルを実現するために必須エリアであるということ盛り込んで頂きたい。
- ・しかし、これまでのような首都圏に向けてエネルギーを供給する単なる生産地ではなく、地域循環が大切である。まず地域でエネルギーが活用されて、地域が豊かになり、人口がそこで増加し、エネルギー産業だけではなくカーボンニュートラルエネルギーを使う産業がこの東北に立地してくるといような、文脈をこの中で組み上げて頂ければと思う。
- ・委員が話していたカーボンニュートラルの動きについて、エネルギーの産出拠点にすることを取り入れて頂くことは大賛成で是非ともお願いしたい。
- ・エネルギーを自給自足することも大事だと思っている。東北で自給自足となると、食料については達成できるだろう。食料のみならずエネルギーも自給自足するように、地域で獲得できて使用もできれば他の事に影響を受けないので、自立した圏域という意味で自給自足という言葉を用いてまとめていただけるとありがたい。
- ・デジタルという観点からは、デジタルは1つの項目というより横串に関係してくる

ところもあるかと思うので、どのように書いていいか少し難しいかもしれないが、ぜひとも入れて頂きたい。

- ・今回のテーマである女性活躍・進出とマインドもどこかに入れるのも重要だと思う。
- ・リカレント教育について注目したい。
- ・経済的な自立や就労支援、女性の正規雇用が受け入れられるような教育の面でも、再度自分の人生をチャレンジできるような環境、仕組みが東北で力を入れてやれる環境を目指していると計画に取り入れてもらうのが良いと思う。
- ・どこまでが自立的かという話になるが、少子高齢化は東北が一番で進んでいるので、そういったところとリカレント教育の相性が良いのではないかと感じた。
- ・秋田県藤里町は、引きこもりの人達の成功地区として全国で非常に注目をされた地区である。やはりリカレント教育をキーワードに行っていて、地域の温かな目でさまざまな人たちを支援していた。地域の個店の商店主が日本酒の保管の仕方を教えたり、あるいは写真館でスキルを学んで頂いたりなど、地域のポテンシャルである温かなエネルギーを多くの人々を支援する。東北はそういったイメージがあり、リカレント教育や福祉をキーワードに混ぜ込みながら入れて頂きたい。
- ・また、東北は縄文文化の発祥の地で長い歴史がある。青森の三内丸山遺跡も含めて、長い歴史が日本人の精神性を勧誘し、東北の六魂祭が非常に精神的支柱として復興にも大きな役割として機能したと思う。
- ・東北6県に加えて新潟の7県は伝統に育まれた祭りや文化が精神的支柱となり、震災からの復興へのポテンシャル、レジリエンス、回復力に活かされたため、キーワードに入れていただければ東北のカラーが出ると思う。
- ・被災地などは復興予算が入り、そういった人達のありがたみや活力を地元の人がしっかり感じている印象を受けている。最初は補助金ベースで行っていたが、そこに自分達のお金出していく循環が出来ているように感じるが、被災してない日本海側はそうしたイメージがあまりない。中途半端な人達という印象、扱いがあり、年配の男性が良きもので学生、女性、若者のような人は中途半端で軽くて見られてしまう。こうした価値観が見え隠れしている。
- ・国土計画も重たいイメージがあるので、何か軽やかな空気感を入れて、中途半端な存在を受け入れる素地のような視点に向かないと、あまり変わらない気がする。中学生、高校生も見つものとして考えていただきたい。

(座長)

- ・現在の図にはめこむというよりも、骨子案の図自体が変わらなくては東北は変わら

ないと思う。

- ・委員の話から連想したことは政策として掲げていく、こんなことを実行していったらいいなという機能論がある。戦略は外部要因と内部要因を勘案しながら、やることとやらないことを選んであるべき姿を描いていく作業だと思う。戦略の実効性や有用性はこれまでもこれからも大事だと思っている。
- ・一方で、東北には中山間地域が多いため、小規模自治体でいろいろな事を行うとき時に必ずと言っていいほど立ち足はだかるのは、誰がやるのかという問題だと思う。
- ・こんなことが出来たら良いと話をするが、結局誰が行うのかとなると尻すぼみになっていく。新しい取組が出来ないかと自治体に話がきても、なかなかそれを実行できないという話が被災地でもあった。
- ・これは被災した東側の地域だけでなく、共通の課題だと思っている。機能論としての計画性も大事であるが、併せて、やりたいことを応援していく素地をつくるのが大事ではないか。できるかできないかということはさておき、何かに挑戦してみたいという若い世代や女性に機会やチャンスが巡っていき、失敗を受容するような土壌を育みつつ、何かが生まれやすいような素地自体を作り土壌自体を耕していきたい。
- ・戦略論でもコーゼーション、エフェクチュエーションの考え方がある。キャリア論でもブランド・ハップンスタンスのような議論があると思う。理論付けはいろいろな観点からされてき始めている分野だと思うが、改めて誰がやるのかという問題がおそらくこうした政策を進めていく上でも壁になってくると思う。そこに対して向き合っていくには、やりたい事がやりたいと言って、周りから応援されて、失敗も受容されつつ様々な資源が誘引されていくような地域像を、サイクルとして土地を耕して行くのが、遠回りかつ長期目線でありながらも正攻法だと思った。

(座長)

- ・認識を変えていくという、人々の思いや今当たり前だと思っていることを変えていけないと出来ないこともたくさんあると思う。
- ・将来像は必要なのかと疑問に思った。新潟まで含む東北に住んでいる全員がこの将来像を目指しこうという計画のあり方自体が、気持ちが悪い感じがある。
- ・むしろこの 10 年の中で、こういうことをしたい人は応援するというメニュー表のようなものがあるのが良いのではないかと。将来像と 4 つの基本方針に対して自由参加だと誰が行うのかと問題になるため、メニュー表のような計画の方が今の議論を繋ぐのではないかと考えた。
- ・例えば、将来像はこういう取組をするとこのような未来が見えるかもしれない、と

いう位置づけにするなど検討してほしい。また、4つの基本方針の文言が長いので、シンプルに魅力のあるキーワードを取り入れてほしい。

- ・建付け自体も今回見直せばよいと思っている。整理するとこのような柱になるなど、分かりやすい積み上げ型でも良いと思う。
- ・そもそも枠組み自体が変わるのかもしれないが、戦略的目標の1と2の復興と防災は当然変わってくると思う。復興がかなり進んでいるところと、ほぼ手付かずのところがある。昔は全て頑張るというイメージがあったが、状況が変わってきている中で、これをどう捉えていくのかというのはなかなか悩ましいと感じた。
- ・1番早いところは復興ではなく次のフェーズに入っていて、ブースターとしながら新しい人や技術を取り入れて新しいまちを作っていこうというようなところもある。
- ・一方でようやく帰還困難区域が解除された場所もある。いろいろなフェーズがある中でこれをどう変えていくのかと考えると悩ましい。
- ・災害に強い防災先進圏域の実現について、言葉としては良いと思うが、各論に入っていく時に考えていけないのは、防災単独ではなく、観光やまちづくり全体に資するものという枠組みの中で防災を考えていきたい。
- ・わかりやすいキーワードというのが大切だと思う。
- ・デジタルは手段でしかないため、例えばスマートシティが進んでいるデンマークは、環境や交通の情報を多く取得することで、自転車を使う道路を整備して健康と環境に役立った。クリーンな都市を目指している都市である。
- ・デジタルは目的ではなく、やりたいことを助ける手段であるため、ランドデザインとしてどういう地域にしたいかという中にうまく埋め込んでいいのではないかと考えている。
- ・基本方針もデジタルで考えていくと全てが繋がるため、縦割よりもすべてが繋がっている雰囲気が出ていく方が良いと思った。
- ・資料2の作り方について、各戦略的目標がそれぞれ基本方針の4つに結びつくようになっている。しかし実際は戦略的目標が基本方針の4つのどれかと結びつくというよりは、相互に関連しているのだと思う。
- ・例えば、戦略的目標が7つあるが、4つの計画基本方針に繋がる線はもっと多いのではないかと考えた。骨子が出来上がった後に、それぞれがどのように繋がるかを議論した方が良いと思った。
- ・新しい将来像の中でやはり大切にしたいのは交流である。電子、情報、経済などい

ろいろなものが合流して活性化するが、それぞれがバラバラでなく連携するため、どう東北として作っていくのかがポイントだと思う。

- ・戦略的目標1から7をそれぞれチェックしていただくだけではなく、最終的なその交流に関しては KPI や数値的に見て行くと、足りない部分とかなり達成できている部分もあるかと思う。

(座長)

- ・委員から話があった通り、東北の人の意識が変わっていかないと、上手く回っていかない。計画に載りにくい部分ではあるが、実現をさせる時には東北にとっては大きなキーワードになると思う。
- ・西日本の人々は、失敗しても何とか大丈夫だと明るい人が多い。時間も緩やかで、東北と比べるとすごく伸びやかに生きているイメージがある。
- ・そうした風土がもう少し出てくると東北も良いのではないかと思う。
- ・そのため、本日の委員会もそうであるが、若い世代の人たち東北を作っていく時に、新しい考え方や委員からご提案いただいているような、本当に出来るかも含めてみんな夢を膨らませていくような地域になってほしいと私も期待している。
- ・皆様から本当に貴重な意見を頂いたので、骨子案は言葉を並べ替えるだけではなく、図柄も変わる可能性があると思う。これを踏まえて事務局において骨子案の提案をいただきたい。
- ・次回は事務局側から今回と全く異なる骨子案の絵が出てくることを期待しながら、皆様と第3回懇談会で色々な意見を戦わせたいと思う。
- ・ぜひ金太郎飴のような内容ではない、東北の将来を考えた計画ができることを期待している。これからも議論を進めていきたいと思うのでよろしく願いしたい。

以上